

SAMPLE サンプル 試読

The background of the cover is a vibrant red. A dark, jagged, mountain-like silhouette separates the red upper half from a purple lower half. In the red area, a blue bird with spread wings is flying towards the right. In the purple area, there are faint, stylized silhouettes of people in various poses, including one standing and one crouching. The title is written in large white Japanese characters across the center.

シェアしてください

SAMPLE サンプル 試読

あんぷらぐ
荒縄工房

SM小説

S
M
小説

あ
ん
ぷ
ら
ぐ
著

荒
縄
工
房
・
発
行

SAMPLE サンプル 試読



シ
エ
ラ
し
て
く
だ
さ
い

SAMPLE サンプル 試読

本作品はすべてフィクションであり、実在する人物・地名・団体とは一切関係ありません。また、特定の個人、団体、宗教、人種、性別などを誹謗中傷する意図はありません。

あんぷらぐ

S M雑誌に「仲ゆうじ」名でS M小説を執筆して作家活動をスタート。その後、編集の仕事に携わる。九〇年代よりネットで複数のペンネームで小説を執筆。二〇一一年「荒縄工房」より「あんぷらぐど」名義で独自の自虐的S M小説、伝奇S M小説などを発表。二〇一九年「あんぷらぐ」に改名。東京在住。

SAMPLE サンプル 試読

目次

奥付	黄昏の中で	ドミノ倒し	四人の選択	崩壊への道	欲望の虜	羞恥と苦痛	メス犬クミ―誕生
604	550	465	370	270	176	84	5

メス犬クミ―誕生

――恐怖を見たんだ。そう、君も見たようにね。だからといって、君にはおれを殺人者呼ばわりする権利などない。もちろん、おれを殺す権利はある。それぐらの権利はあるさ、君にもね。だけど、おれを裁く権利は、君にはない――映画『地獄の黙示録』より

フアスナーの金具を唇で探り、その金属の味が口の中に広がるのに任せて、わたしは彼の汗とおしつこのニオイを思い切り吸い込みます。

引き下げていくと、固くなつた彼のものが微かに感

じられて、ほかのことにはなにも考えられなくなります。
一日穿いていたブリーフは独特の臭気で、いまではそれが誰のニオイかわかるんじゃないかと思うほどです。

最初はブリーフの上から軽く歯をあてて、その向こうにある肉茎を感じます。彼の手がわたしの頭を軽く押さえ、指で髪をまさぐります。最初から固いと思っただのに、もっと固く大きくなっていきます。このスイツチが入ったような感じが好きです。わたしに対して攻撃的な気持ちを持つてくれるこの瞬間。

彼の息はまだそれほど荒くなっていないのに、わたしだけあさましく、鼻を鳴らしながら顔を埋めます。

彼の指先に少し力が入ったような気がして、見上げると、彼は微笑んでいました。わたしもうれしい。

ブリーフを噛んで下ろしました。

大きくなってしまったそれを口だけで出すのはなかなか難しいのに、いまではかなり上手になりました。フアスナーにできるだけ当たらないようにして、亀頭が顔を出したらそのまま顔を埋めるように、口に含みながら、顔全体でブリーフを押し下げていきます。頬に固いフアスナーが当たりますが、わたしが痛いのはどうでもいいことです。

口の中いっぱい彼のもので満たされていきます。あれから何百回と味わってきたのに、飽きることはありません。

りません。もう一年になるのです。彼のその部分もすっかり自信に溢れ、堂々としています。

鼻に彼の濃い陰毛があたります。亀頭で口の中がいつぱいになる瞬間も好きです。

膝立ちのわたしと、その部分の高さとか、ニオイとか、亀頭部分が口に入ったときの感触で、誰かわかるぐらいになりました。

言われるまでもなく、さらに口を開いて喉の奥まで入れます。これからはじまる行為を想像して熱くなります。

微かな動きですが、見なくても彼が最近愛用している乗馬鞭を手にしたことがわかります。それを握り締

めているようです。だから少しお尻を突き出しました。彼の指が剥き出しのオツパイを掴みました。

来る……。

鋭い痛みがお尻に走るとき、もうわたしはわたしではなくなるのです。

去年の十一月……。あのときの決意は、間違っていない。信じています。

友情は愛情にならない――。

岳^{がく}に言われて、ハツと気づいたのでした。ずっと同じ地域で育ったわたしたち五人。男四人に女一人。妙なグループです。

なにをするわけでもなく、放課後、塾、学校でいつも一緒。

だけど、学校という場を失ってしまうと、この関係もいままでとは変わってしまう。

みんなの進路がはつきりした日。岳と二人だけになるチャンスがありました。

「このままバラバラになっちゃうって、イヤだな」とわたし。

「句実子、この先に待っているのは、ガキの関係じゃないんだ。社会人になるやつもいるし、ぼくだって進学する。それぞれ生きる。そういうこと」

「でも……」

「友情は変わらないんだから。いつでも会えるじゃないか」

そして、「悪いけど」と前置きしてから、友情は愛情にならないと言われたのです。

でも、わたしはもう、これ、友情じゃないのに……。この三年間、駅裏の地味なスナック「わたる」がわたしたちのたまり場でした。学生時代からスナックにいるというのは妙ですが、仲間の「コン」つまり左近の実家なのです。

夜遅くならないとお客の来ない店なので、それまでは喫茶店のようなものでした。

「今度みんなで会うときは、コンのところで酒が飲め

るよ。もう大人なんだから」

コンの両親は水商売だからか、むしろ厳しくて、一切お酒を出してくれませんでしたし、タバコも禁止でした。

「句実子ちゃん、あいつら悪いことをしたらおばちゃんに言いつけてよ」とコンのお母さんからよく言われていました。

「優しそうに見えても男ってやつは……」と言葉を溜めてから「ケダモノだからね」とニヤツと笑うのです。

思えばキラキラした青春というほどでもないのですが、みんな普通にあるはずのいろんな欲望を笑い飛ばして付き合っていました。セックス、恋愛はわたした

ちの共通した憧れであり悩みであり恐怖であり、それでいて案外、非現実的なのでした。

そういうのを表に出すのは疲れるので、せめて五人でいるときぐらい、そうしたものをそつと隠しておける場をみんなで作っていたのかもしれない。

「岳、わたし、好きなの。一緒にいたい」

思い切って告白したのです。

「うん。ぼくもだ。だけど、友情は愛情とは違う。友情があるからって必ず恋愛になるわけじゃないだろう？　ぼくたちの場合はとくに」

あまりに素早く淀みのない返事。こうなることを予想していたかのようです。

「どうして……」

「キヨもコンもケンも、みんな句実子が好きだ。おまえがみんなを好きなのと同じぐらい」

でも、それではわたしの気持ちは……。

「おまえがぼくたちの誰かを恋愛対象として選ぶみたいなことを、させたくない。ぼくだって、他のやつを無視して隠れて句実子と付き合うなんて、できない」

実は、今年になってからコン、キヨ、ケンにも順番に告白していたのですが、みんなから同じように言われてしまったのです。

岳にまで言われたら、わたしは……。

都心から電車で一時間半ほど。地方の小さな町です。

ガソリンスタンドもコンビニも町内には一つあるだけ。こんもりとした里山がランドマークのように街のあちこちから見えています。田んぼの中に高い木々で囲まれた古い神社があります。クルマで三十分ほどいけば本格的な山があつて、温泉やダムもあります。休日には、自転車やバイクでツーリングに来る人たちがいます。平日は静かな町です。いえ、静かを通り越して、死んだような町です。

わたしたちはそれでも、ここで生きていることを満喫しようと努力してきました。

岳は進学するため、東京に下宿することになっていきます。年明け早々に下見を兼ねて東京へ行くらしいで

SAMPLE サンプル 試読

す。

わたしも東京に行ってみたい。東京での就職を希望して、いくつか面接を受けたのですが、まだ採用になっていません。進路がはっきりしていないのは五人の中ではわたしだけでした。

「おまえはここにいろよ。仕事ぐらい見つかるだろう？」

「東京、行ってみたい」

岳は微笑みました。

「ムリすんな、句実子。おまえの気持ちはみんながわかってる。おまえ、みんなに告白したろ？」
知っているのです。

「夏休みの前に、ぼくたち、徹底して話し合ったんだよ。出会った頃は気が合う仲間だった。いつの間にかぼくたちは、男と女になっていた。句実子は女子の友達、ほとんどいないよね。ぼくたちのせいでもあるし……」

「そんなことないよ」

女子からわたしは気持ち悪い女と見られていたでしょう。何度か岳やコンを狙っている女子から脅されたこともあるし。ヤリマンなんてウワサもずっと流れているみたいだし……。

「一度だけ誰ともなく、おまえを無理やりぼくたちのものにしようという話になったことはある」

「えっ？」

それは驚きでした。いえ、衝撃でした。

体が熱くなつて、目がうるうるしてきました。

それこそ、わたしが本当は求めていたものかもしれない……。

四人に無理やりされて、彼らの女になるのです。どうせ、学校の女子たちからはそう思われているし。

ケダモノの女になりたい……。岳たちにケダモノになつて欲しい……。

「ほかの男に匂実子が取られるぐらいなら、ぼくたちでなんとかしたいってね」

エロマンガのような妄想です。裸の彼らがわたしに

つぎつぎと……。

そんなことは現実にはあり得ませんし、もしあつたら、わたしは彼らを軽蔑し、深く傷ついてこの町を去ったでしょう。そして二度と彼らに会いたいなんて思わず、一生彼らを恨んで生きたでしょう。

それは、されたことに対する怒りとかではなく、もつといい関係でいられたはずで、わたしはむしろそれを望んでいたのに、一方的に壊されてしまった恨みです。

ちよつとエッチなことを妄想したとしても、現実になるとゾツとするぐらいの恐怖でしかないですし、彼らが欲望だけでそんなことをする人たちだったら、が

つかりして人間不信になったに違いありません。

「ごめん。あくまでも話だけだから」

「わかつてる」

泣いているわたしのことを岳は誤解したようでした。いつものように、みんなで楽しく過ごした最後の夏休み。一步間違えれば、わたしが彼らに襲われるチャンスはいくらでもあったし、もし現実になったら、いまこんな風に岳と話していなかったでしょう。

きつとショックで、それをどう受け止めていいのかもわからず、頭がおかしくなっていたかもしれせん。でも、いまはちよつと違う。

みんながわたしと同じ妄想を抱いていたことに驚い

ていました。男の人は友だちとしてなら男女問わず平等に付き合えても、恋愛になるとほかの男を寄せ付けず、一対一の関係を求めてくると思い込んでいました。ぼくだけの君でいてほしい、みたいな。

卒業前にわたしの願望を叶えてもらうためには、誰か一人と付き合うしかないのではないか。

誰とでもいいから、わたしの望みを叶えてほしい……。。

でも、待っていても彼らからはそういう言葉や態度は示してもらえず。だったら、こっちから行くしかないって決意したのです。

早くから東京に進学することを夢見ていた岳は、最

奥付

お読みいただき、ありがとうございました。

二〇二四年十一月刊行 第一版

著作権 あんぷらぐ（あんぷらぐど）（荒縄工房）

荒縄工房の情報は下記サイトへ

●ブログ「荒縄工房」

●ホームページ

●荒縄工房 S M 研究室

●今日も上機嫌ってわけないだろ

コメント、メッセージ歓迎。ご意見、ご感想、ご提案など随時、ブログで受付中。